

霸王の家はおういえ (前編)

定価 九五〇円

発行 昭和四十八年十月二十五日

十九刷 昭和五十四年七月五日

著者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本株式会社

発行所

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

© Ryotaro Shiba, 1973. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

霸王の家

前編

司馬遼太郎

新潮社版

装幀 中村正義

霸王の家
(前編)

三河かたぎ

奥三河みかわの山のなかの坂をのぼって、松平郷という、これ以上は山径やまみちもないという行きどまりの小天地に行つたときの夏の陽ざかりの印象は、筆者にとってわすれがたい思い出になっている。

(ここがあの徳川家の発祥の地か)

とおもえば、草木まで意味ありげにおもえてはくるのだが、なににしても山が深く地がせまく、しかも気づいてまわりを見まわしてみると、みぞみぞほどの流れもない。水がないというのは、米がとれないということである。徳川家の祖である松平氏は、ここでひえやあわを食べ、日常はキコリとして山を駆け、木を伐つていた強悍きやうはんなグループであることは、地形をみればたれにでも推察はつく。このことは、元帝げん国をおこした連中が、北アジアのアルタイ山のふもとで遊牧していたささやかなグループであつたことをおもわせる。

そういうキコリ仲間に、あるとき突如、親玉が出現して戦闘員に組織したのが、家康より八代前の親氏であらう。かれは流浪の賤民で、この山間部にながれつた。親氏はこのキコリ部落に

ながれついたときは乞食坊主の姿をし、

「徳阿弥」

と名乗っていた。阿弥という名のつくのは、室町期に流行した時宗の徒のシルシである。念仏をとなえては食を乞うて諸国を遊行してまわり、どこで果てるともわからない。諸国の奇譚奇説や、風俗人情をよく知っており、なむあみだぶつをひとにすすめるだけでなく、そういう話題が豊富であったから、話上手の遊行僧なら、土地の長者に気に入られれば二月も三月も逗留する。ときにその屋敷の妻の心を蕩かしたり、娘に通じたりして、この種の風来坊は定着民にとってはゆだんがならない。

松平親氏、つまり徳阿弥は、どうやらその種の魅力に富んだ人物であつたらしい。

かれは三河をさすらうち、西三河の酒井郷の土豪酒井家と、この山間の里の土豪の家を往来するうち、両家のおんなに孕ませてしまい、それぞれ男子ができた。松平・酒井という小さな連合勢力が誕生するのは、このときからである。徳阿弥は、松平郷に土着した。土着するとともにキコリどもを手なづけ、やがて、

「汝らは、こんな山中でひえやあわを食うて一生不自由していたいのか」

と、けしかけた、とおもわれる。山をくだって里へ出れば米がある。それには途中の山砦や小城を攻めつぶしてゆくという命がけの作業をかさねてゆかねばならないが、松平氏とその族党は、それをやった。二代目の泰親のときに中山七名という小さな段々畠の土地をうばい、やっと米作地帯にたどりついた。これまた、中原の農耕地帯にあこがれて長城に対しピストン運動をくわえてきた北アジアの遊牧民族に似ている。

以後、家康の代までこの家系はときにさかえたり、ときに衰えたりしたが、ともかくも三河国で三割ほどの面積を領分にし、岡崎城の城主であるほどの分限ぶげんになっていた。しかし、新興は新興でも、大名といえるほどの存在ではない。三河でのいくつかの大土豪のうちの代表的な存在というべきもので、ひとつ油断をし、働きがにぶると、戦乱のなかで消滅するかもしれない存在だった。

五万石でも岡崎さまは

お城したまで舟がつく

と、いまでも座敷でうたわれたり舞われたりするが、この唄にある岡崎城は徳川時代の模様のもので、堂々たる天守閣ももっている。が、家康が城主のあととり息子としてここでうまれて幼年期をすごした岡崎城というのは天守閣などはむろん櫓やぐらや門の屋根もかやぶきで、当地は石の産地ながら石垣などもなく、ただ堀を掘ったその土を掻きあげて芝をうえただけの土塁がめぐっている。城の西側はずんと落ちくぼんで矢作川やはぎがわが水をたたえて南流しており、西隣の尾張からの敵に対し、水の要害になっている。尾張の新興大名は織田氏である。

「三河はわしの草刈り場だ」

と、織田信秀（信長の父）は称していたが、かれはしばしば軍勢を催しては、三河との国境の矢作川をわたって、三河に侵入した。茅ぶきの岡崎城岡崎城にいる三河岡崎衆は、そのつど矢作川流域の野をかけまわって尾張からの侵入軍と戦わねばならない。

「尾張衆の具足のきらびやかさよ」

と、この当時三河ではいわれた。尾張は一望の平野で灌漑はやくから発達し、海にむかつては干拓がすすみ、東海地方きつての豊饒な米作地帯であるだけでなく、街道が四通八達して商業がさかんであった。それからみれば隣の三河は大半が山地で、

——人よりも猿のほうが多い。

と尾張衆から悪口をいわれるような後進地帯であった。ただ国人が質朴で、困苦に耐え、利害よりも情義を重んずるという点で、利口者の多い尾張衆とくらべてきわだって異質であった。犬のなかでもとくに三河犬が忠実なように、人もあるじに対して忠実であり、城を守らせれば無類につよく、戦場では退くことを知らずに戦う。この当時すでに、

——三河衆一人に尾張衆三人。

ということばすらあったほどで、尾張から大軍が侵入してくるときも、三河岡崎衆はつねに少数で奮戦し、この小城をよくもちこたえた。守戦でのつよさではかれらは天下無類というふしぎな小集団であった。ついでながらこの小集団の性格が、のちに徳川家の性格になり、その家が運のめぐりで天下をとり、三百年間日本国を支配したため、日本人そのものの後天的性格にさまざまな影響をのこすはめになったのは、奇妙というほかない。

家康というのは、幼時、下ぶくれで目が大きく、童としては狂躁なところがまっただなかつた。婦人がみれば憐れをそそのほどに可愛い少童だったであらう。あわれといえば家康の郎党である岡崎衆が、とくにその女房どもが、

「世に、若殿ほどあわれなお子がおわそうか」

と、涙ながら、手仕事のあいまいにこの少年の不幸をつねに語りあったことも、「三河岡崎衆」という、この酷薄な乱世のなかではめずらしいほどに強固な主従関係、というよりもはや共同の情緒をもつ集団をつくりあげて行ったことに、大いに役立っている。家康は、数えて三歳のときその生母於大が、突如ふってわいた政治的事情のためにこの岡崎松平家を去らざるをえなくなり、母子生別した。さらにかれ自身も六歳のとき、人質としてこの三河を離れ、他国に流寓した。少年の運命としては、もつとも劇的である。

三河岡崎衆を結束させたのは、この少年の悲劇性であろう。三河人は、先進的な商業地帯である尾張の住民たちよりも、はるかに濃く中世的な情念を残している。岡崎城下に氷雨の降る宵など、郎党たちは家々で、

「若殿はいまごろどうおすごしであらう」

と、涙まじりに語ったにちがいない。

まったくばかな話で、家康はこの六歳のとき人質として送られるさきは東隣の強国、駿河今川家であつたはずであるのに、途中かれの身柄を盗む者があり、しかもそれを青銭百貫文という安さで、西隣の織田家に売りとばしてしまつたのである。悲劇もここまでくれば、滑稽というほかない。

話を順序だてると、家康の岡崎松平家というのは半独立^目で、東隣の遠江と駿河の両国をもつ今川家の武力を後楯^{うしろたて}としてたのみ、それによって西隣からの尾張織田家の脅威をしのいでいた。尾張衆が矢作川をこえて侵入してくるときは、岡崎松平家としては十日も城をもちこたえさえず

れば、駿河から応援の大軍がかけつけてきてその急場をすくってくれるという関係であり、この今川家に対する従属のつながりを強くするために六歳の家康が駿府（静岡市）におくられることになったのである。

かれは、陸路、東へ行き、こんにちの蒲郡（当時、西ノ郡）から船に乗り、三河湾を横切って途中、渥美半島の田原というところに上陸した。田原の城主は、戸田氏で、松平氏とは三河においては同格の豪族であり、この家から家康の義母がきていたから、姻戚の関係になる。城主の戸田康光は家康を迎え出て、

（これはおもしろや）

と、ひそかに胸算用したのは、この幼童を織田側に売ってはどうか、ということであつた。今川氏と敵対関係にある織田氏は手を拍（う）ってよろこぶにちがいない。

幸い、戸田氏はその領地が渥美半島であるため、大船をもっている。家康の一行がこの戸田氏のもとを訪ねたのも、駿府ゆきの大船を借りるためであつた。

「よろしゅうござるとも」

と、戸田康光は家康を大船にのせ、沖へ出ると東へゆくと見せかけてにわかに西へ航走し、尾張熱田に上陸させ、織田信秀に連絡した。

「なんとこれは、勿怪（もつげ）もなきものがころがりこんだ」

と、信秀は大いによろこび、戸田康光に銭をあたえて家康をうけとり、これを人質とした。これについて、後年、『三河物語』の筆者である大久保彦左衛門は、

「竹千代様（家康）、六歳のとき、質物（しちもの）として駿府へ御下向（ごげこう）」

と、このいきさつを書き、「永樂錢千貫文にて竹千代様を売らせ給う」と、表現している。彦左衛門は自分の大久保家が、徳川（松平）家にとって、この家がキコリの大將程度の家であったころからの古い郎党の家で代々忠誠をつくしてきたにもかかわらず、本家が徳川幕府から冷遇されたことに憤慨し、晩年、暗い怒りにまかせてこの『三河物語』を書いた。彦左衛門の氣持のなかでは、幼童の家康を売った戸田康光の一族が、のちに家康に随従し、徳川家が天下をとるとともに戸田氏から三軒（大垣、宇都宮、足利）も大名ができたことについても、自分の家への冷遇にひきくらべて腹立ちがあったであろう。

家康は尾張で二年間いた。

そのうち、三河岡崎にあっては、家康の父広忠が二十四歳という若さで急死したため、人質の家康は本国に不在のまま松平家の当主となった。

そのあと、尾張織田家と駿河今川家とのあいだに人質交換といったふうの政治現象があり、家康はこんどは東のほうへ流寓し、駿府今川家にひきとられる運命になった。

「お痛わしとも何とも、申すすべなし」

と、当主不在のまま三河岡崎城下にのこっている郎党たちは、いよいよこの幼主の悲劇性をおもい、それを秘めやかに語りあった。

この郎党たちの境涯も、悲惨だった。このころ今川家は松平家をもはや同盟国とは見ず、まったくの属邦にしてしまっており、

「潰さぬがましとおもえ」

という態度で、岡崎城をも「今川預り」という体で実際には今川家の尾張への前線要塞にして

しまい、城代は今川侍が駿府からやってきてすわることになってしまっていた。いわば進駐軍であり、三河岡崎衆のあわれさはかれらと道で出遭えば相手を貴人のようにあつかい、自分は道端に身を避け、腰をかがめて土民のような礼をとらざるをえなかったことであつた。さらにかれらを困窮させたのは、封禄がなくなつてしまったことである。

「酷なものよ」

と、ひとびとはなげいた。

「せめて旧松平領のうち、山中三百貫の地でも岡崎衆の養い分として今川家が残してくれたなら、われわれもかほどまでに餓えまいものを」

と、こぼす者もいた。人間の残忍さというのはこういうものであろう。人間が群れて、その集団が強勢になれば弱い集団に対して、それがまるで当然の権利であるかのように酷薄になる。駿河国の強勢を背にして今川家の城代とその家来たちは旧松平領の租税のほとんどを奪つてしまひ、被保護者である岡崎衆には一粒の米もあたえなかつた。岡崎衆はみな農夫にもどり、わずかな土地を搔いては物を作つてかろうじて餓えをしのだ。三河人のおかしさは、それを当然の原理としてうけとつていたことである。

——駿河衆がわれわれを保護してくれている以上、米をあの人衆がもつて行つてもしかたあるまい。なにしろ三河松平家はコヤケ（小さい家）だ。

コヤケびとの心のつつましさを、三河岡崎衆はもっているらしい。三河人は平気で我慢できるが、たとえば隣国の尾張衆はまったくちがつていた。尾張には商業という、人間の意識を養えたふしぎな機能が、地をおおつて波立っている。一文の原価のものがときに百文にもなるといふ魔

術的な可能性をもった世界にいる人間にとっては運命に対する忍従心などは商業上の敗者の考えであり、そのかわりに自分の能力を信じ、その能力しだいであらう奇跡をも生み出すという信仰を、濃淡の差こそあれ、尾張衆ならだれでも持っている。信長や秀吉はその代表的性格にすぎないであろう。自然、尾張衆は自己に対する信奉心がつよく、もし尾張衆が、三河岡崎の松平家の郎党のような目に遭えば、ほとんどが近国に散って諸大名に自分をしかるべき知行で売りつけて個々に新運をひらこうとするにちがいない。

——三河馬鹿。

と、尾張衆は三河の農民をあざける。しかし三河という国の風土にはもともと尾張のような風土がなく、三河衆はどうにも尾張風の精神の軽快さをもつことができない。

この時期の三河岡崎衆をうごかしていた精神は、

「だから汝らは働け」

という、尾張衆からみればおよそ阿呆臭い思想であつた。このことばを、三河岡崎衆の長老株である鳥居伊賀（忠吉）はたえずいつて若い者をはげました。働け、というのは、戦場で働くことであつた。ついでながら、

「駿河衆（今川家）は狡猾」

ということになっている。かれらは尾張の織田家と戦うとき、三河岡崎衆をかならず先へやつた。先手であつた。先手は戦場の消耗品で、死ぬ率がたかい。それでもなお、鳥居伊賀は、

「三河者は死にぐるいして働け」

というのである。尾張衆からみれば「三河馬鹿」であつたであろう。事実、三河岡崎衆は戦場

ではよく働いた。ある戦場では、

「名ある岡崎衆、郎党までも過半討死す」

という惨況にまでなった。さらにかれらが「三河馬鹿」であることは、戦場での報酬は無料であることだった。今川家の指揮をうけ、今川家のために働いているのに、戦場で死のうが手柄をたてようが、いっさい今川家から沙汰がなかった。三河岡崎衆もそれを当然とし、

「われらの主君が、今川家の人質になってござる以上、やむをえぬ」

とおもっていた。個人の栄達へのあこがれが時代のエネルギーになっている乱世であって、このように多分に土俗的な武士団が、東海地方という先進地帯に存在したことじたい、奇跡であつたろう。

尾張風な目からみればこのおかしな連中の理屈は、なにやら奇妙なものであつた。

「働け」

というその理由は、

「このように今川のために死働しにばたらきしてさえおれば、今川家のほうでもやがて我等に同情し、我等を信頼するようになり、ひいては駿府に構われてござる竹千代（家康）様を返してくれるにちがいない」

というものであつた。可憐さをみせて駿河衆の情に訴えようという。駿河の狡猾衆といわれるほどの連中がそういうことで心を動かすはずがなかったが、幼君の留守をまもる三河岡崎衆としてはそれをそう信じて働くほか、踏んばりの足場がなかった。かれらにとってそれは期待というより信仰のようなものであり、いや、事実、信仰だった。この三河という地帯は念仏のさかんな

ところで、日常の会話にも念仏用語がでた。人生は、無明長夜むみんちやうやであるという。念仏はその無明長夜のともしびであるという。

「竹千代様は、われわれが無明長夜のともしびよ」

と、三河岡崎衆は口ぐせのようにいった。竹千代はかれらの生甲斐のようなものであった。

竹千代は、駿府にいる。

その成長にともなういろいろなうわさが、三河岡崎城下にながれてきた。そういう伝聞がさまざま岡崎城下にながれてくるたびにひとびとは寄りあつまって涙をこぼした。

「お子柄こがらが、すぐれておわすとか」

などと、最初は竹千代の利発さについての情報が多かったが、その子柄こがらも成人するにつれて、「お付き衆に思いやりがおありになるとか」

などと、よさの要素がふえてきた。

「鷹狩りがお上手なそうな」

「お心が優しいのがなにより」

「しかもお年端としはもゆかれぬのに、えらいものじゃな、威が、それも自然じねんにそなわった威がおありになる」

「威」

「思いやりの優しさ」

というのが、古来、日本にあっては人の大将たる二大要件とされている。ほかに、偶然知恵がそなわっていたりたまたま勇武の性格であったりするの、そうあるほうがのぞましいという程